

## 『オセロー』における苺模様の刺繍のハンカチ（1）

下 田 梨 紗

## 『オセロー』における苺模様の刺繍のハンカチ（1）

A Handkerchief in *Othello* : 'Spotted with Strawberries' (1)

下田 梨紗

はじめに

ウィリアム・シェイクスピアの四大悲劇のひとつに選ばれている『オセロー』。その戯曲の中でもっとも重要な小道具と言えば、オセローがデズデモーナに贈った苺模様の刺繍の入ったハンカチである。

『オセロー』はムーア人将軍オセローがデズデモーナと心から愛し合い結婚するものの、旗手イアーゴの策略によりデズデモーナが副官キャシオーと不貞を犯しているとオセローが信じ込み、嫉妬に苦しんだ末に、デズデモーナを殺し、自らも自害するという内容である。オセローがデズデモーナに初めての贈り物として贈ったハンカチを彼女がなくなってしまったことにより、彼は妻の不貞を確信することになる。それゆえ、そのハンカチは悲劇的結末を引き起こす最大の要因となる重要な小道具となっている。シェイクスピア作品には『オセロー』のほかにも『ヘンリー六世 第三部』や『ジョン王』など幾つかの作品にハンカチが小道具として用いられているが、これほどシェイクスピア劇において重要な小道具は『ヴェニスの商人』の指輪を別にしては他にはない。そのハンカチがオセローのデズデモーナへの最初の贈り物である点、オセローの故郷の魔術的な力が織り込まれている点、絶対に失わないように約束させている点などを考慮すると、非常に重要で意味深いモチーフであり、重要な研究対象のひとつとなっている。

『オセロー』にも、他のシェイクスピア作品においてと同様に幾つかの種本が存在し、そのうち最も『オセロー』と似通っているものが1566年にヴェニスで出版されたジェラルディ・ツィンツィオ『百物語』第3篇第7話である。この種本においても、若干名前は異なるものの『オセロー』でのオセローやデズデモーナ、イアーゴやエミリア、キャシオーにあたる多くの人物が登場する。イアーゴにあたる旗手がデズデモーナにあたる婦人に恋をしていることや、結末部が異なるなどの違いはあるが、旗手がオセローにあたるムーアにキャシオーにあたる副官との不義を仄めかし、ハンカチが重要な証拠となって2人を殺そうとする点などは非常に似ている。『百物語』第3篇第7話においても重要な小道具となっているハンカチは『オセロー』とは異なり、ムーア風の装飾が施されている。しかしシェイクスピアはこれを苺模様の刺繍のハンカチへと変えていることから、意図的にハンカチの模様を変えたと言えるだろう。その変遷を検討し、その背後に見られるシェイクスピアの意図を探っていく。

また、ただ一言にハンカチと言っても、当時のハンカチは現代のものとは見た目や価値、そして使用目的も大きく異なる上に、作品中でハンカチそのものについての説明があまりに少ないために、当時と現代の観客の描くイメージに差異が生じることになる。

そして、現代とは異なる当時の価値観や歴史を合わせて検証し、『オセロー』に登場す

るハンカチが一体どのようなものであったのか、ハンカチの形状、柄、色彩といったハンカチそのものの特徴に着目した上で、その歴史的背景を踏まえて論じる。そしてシェイクスピア晩年のロマンス劇『シンベリン』を取り上げ、「汚点」という観点から『オセロー』との類似点を探る。

## 1. シェイクスピア時代におけるハンカチ

『オセロー』に登場するハンカチが重要な役割を担っていることは、17世紀にトマス・ライマーが*A Short View of Tragedy*の中で有名な批判をしたことから明らかである。トマス・ライマーは、ツィンツィオの種本にはムーア人という呼び名しか存在していない主人公にシェイクスピアは「オセロー」という名前を与え、更には彼を「ヴェニス人のムーア人」と呼んでいることなどを非難の対象にしている。また、『オセロー』を「血なまぐさい茶番劇」(‘bloody farce’)だと評した上に「オセローの悲劇」ではなく「ハンカチの悲劇」と呼んだほうがいいと皮肉っているほどである。それゆえ、この戯曲の寓意のひとつに「世の善良な妻たちに、自分たちのリネン類にはよくよく注意するようにという警告」を挙げ、痛烈に風刺している(Rymer, 87-89)<sup>1</sup>。何故『オセロー』では1枚のハンカチがこれほど運命を狂わせてしまうのか。この戯曲はトマス・ライマーが強く主張したように、「単なる馬鹿げたつまらぬ争いごとの悲劇」なのだろうか。

ハンカチ1枚と言ってもシェイクスピアの時代においての意味は現在とは非常に異なる。第1に、稀に高級なものがあるとは言え、現在ではハンカチは高級品であるとは言いが、ハンカチは当時大変高価であったことである。今日のような小型のハンカチは中世期末にヨーロッパの上流階級の人々の間で一種の装飾品として持ち始められたものである。

当時は四角い麻のものが一番多かったようであるが、中には隅に金色や銀色のタッセルがついた贅沢なものも存在していた。また16世紀から18世紀頃のハンカチには絹地に刺繍やレースを施したもの、時には、レースの網目に宝石を縫いつけたハンカチまでもあったという。そもそも当時は絹が大変高価なものであったために、ハンカチが贅沢の代名詞とされていた(田中、539)。

1540年に英国貴族のニコラス・ダイヤーという男が遺言書にオランダ製ハンカチ2枚の相続人を指定した記録が残っているほか、イタリアではとてつもなく高価であった金糸織ハンカチというものもあったという記録も残っている(辻原、161)。また、イングランドやイタリアでは正装し、ハンカチを手を持っていた肖像画が数多く描かれていることからしても、ハンカチが大変な高級品であったことが伺えるだろう。

第2に、ハンカチは高価な装飾品という面のほかにも重大な意味を併せ持っていた。当時のヴェネチアでは他のヨーロッパ諸国と同じく結婚は家同士のものとされ、第三者の介入によって両家の父親の間で決められるのが普通であった。男性側の親が反対している場合よりも、娘の親が反対している場合のほうがより問題視される。このような場合の対処法は、以下の2つの方法があったとされている。まず1つ目の方法は、公衆の面前で目当ての娘の顔を覆っているヴェールを引き剥がして抱擁し、接吻することであった。当時のヴェネチアでは、特に未婚の貴族の女性たちは外出さえも自由に行き出ることが出来ず、唯一の外出の機会は教会に行くときだけであった。その時でさえも娘たちはヴェールをつけなければならない、教会の祭壇の前にひざまずいた時に初めてヴェールを少しだけ上げられることを許されていた。そのため、男性に娘のヴェールを引き剥がされ、尚且つ接吻されるような事態が発生してしまうと、娘の名誉のために

も結婚をさせなければならなくなるのである。

2つ目の方法は教会の中で娘の持っているハンカチを奪うことであった。ヴェネチアの貴族の女性たちは精巧なレースが幅広く縁を囲んだ美しい芸術品で、その片隅に自分の名の頭文字が刺繍されているようなハンカチを持っていたが、それらは豪華なだけではなく、直接肌につけるものと同様なものと考えられていた。したがってそれを失くしてしまったら、他の男性の手に渡ってしまうと気を許した証拠と見られて大変な問題となるのである。常に娘の顔を覆っているヴェールを無理やり引き剥がして接吻する強硬手段と、娘のハンカチを奪い取る方法が結婚する方法として並列に並べられていることから、当時のハンカチの重要性が窺い知れる。このような歴史背景を考慮してみるとオセローが妻デズデモーナのハンカチをなくしたことに對し激怒し、たった1枚のハンカチの紛失で彼女の不貞を決定付けてしまったことも理解できるのではないか。

また、1489年には恋する若者とその彼に加勢した友人たちが教会の中で娘からハンカチを奪ったという事件が記録されている。その6人の若者と友人たちを含めて全員が2ヵ月もの牢獄生活を強いられることになる。また同様な事件が1530年にも起こっており、これには4年の国外追放の刑が言い渡されている<sup>2</sup>。これらの重刑が処された事件を見ても、現在のハンカチとは大きくその価値が異なることが伺えるだろう。

また、現代ではハンカチといえば正方形のものが主流であるが、以前は正方形だけでなく卵形、円状、長方形など様々な形があった。これらのハンカチを正方形へと統一したのはフランス国王ルイ16世の王妃マリー・アントワネットが夫に進言したためであると言われている。当時のフランスではロココ趣味が全盛となり、三角形のハンカチまで存在したらしい。そして1785年6月2日にルイ16世が法

令を出し規格が統一された（辻原、163）。

『オセロー』の初演は一体いつなのだろうか。最も古い上演記録としては、1604年の宮廷の祝宴会計簿に「11月1日万聖節王宮ホワイトホール饗宴の間にて国王一座による上演」という記載がある（大場、2008、xxv）。この年にはペストが猛威をふるっていたために4月までロンドン市内の演劇興行は禁止されていたことを考慮すると、1604年11月1日より僅か数ヶ月前に地方で上演されたのが初演と考えられ、学界の執筆年代の推定は一般に1603-04年とされている（大場、2009、128）。

これはフランスでハンカチが正方形に統一される200年近く前のことになるため、当時のイングランドがフランスからの計り知れない影響を受けていると考ええると、イングランドにも多数様々な形のハンカチが存在したと考えられるのである。

しかしながら、現代の読者はハンカチと言われれば現在の四角形の小型なハンカチを思い浮かべ、観客はそれを目にすることだろう。そして現代の単に汗や手を拭くものとしてのハンカチという価値観でハンカチを見てしまいがちである。だが、現在と執筆された当初とでは約400年の隔たりがあり、思い浮かべられるハンカチの像がまったく異なる可能性もあるのである。

## 2. 『オセロー』におけるハンカチ

### 2-1 ハンカチの描写とその神秘性

本節では、オセローがデズデモーナに初めて贈ったハンカチはどのようなものであったのかを見ていく。ハンカチの具体的な外見の描写がされるのはイアーゴの台詞の中で「イチゴの刺繍のしてある」'spotted with strawberries'（Ⅲ.3.432）と言及されるのみであり、具体的にどのようなハンカチであったのかは定かではない。明らかになっていることは、'strawberries' と複数形になって

いるために複数の苺が刺繍されていることだけであり、どのような苺であるかも描かれていない。しかし、現在我々が口にしてる苺は品種改良された一般的に和名がオランダイチゴとして知られるものであり、今日のような大粒の栽培種が出来たのは19世紀であると言われていたため、少なくともシェイクスピア時代の苺は現在よりも小粒であり、現在のものとは異なるだろうと推測することは出来る。そして小粒の苺が数個ハンカチの端のほうに刺繍されているのではないかと想像することは出来るだろう。劇中でハンカチを常に広げているはずはなく、折り畳んでいても観客に苺の刺繍が見えるよう端のほうに刺繍されていたことは間違いのないだろう。イアーゴの妻であり、デズデモナの侍女であるエミリアがデズデモナの落としたハンカチを拾った際に、その刺繍の模様を写し取ってからイアーゴに渡そうとしていることや、オセローの副官であるキャシオーが部屋に落ちていたそのハンカチを拾い、娼婦であるビアンカにその模様を写し取ってほしいと頼んでいることから、ハンカチの刺繍が誰もが思わず写し取ってしまいたくなるほど見事なものであったのは疑いのないことであるが、それ以上のことは想像力に頼るほかないのだ。

しかし、ここで注意を要するのは、シェイクスピアが意図的に具体的なハンカチの形状や特徴の描かなかつたわけではないのだろうということである。この時代の戯曲は、現代の戯曲と比べて登場人物や場所、小道具の説明などが明らかに少ない。他シェイクスピア作品では『ヴェニス商人』において、ポーシャがバッサニアへ、ネリッサがグラシアノーへ贈った指輪が結末部にかけて『オセロー』には劣るものの重要な小道具となっているが、それもまたただ指輪という記載があるのみであり、具体的にどのような外見なのかについては、まったくと言って良いほど言及が無いのである。

このように重要な役目を担っているにも拘わらず具体的な描写があまりにも少ないハンカチであるが、その他にもミステリアスな面を併せ持っている。イアーゴによる、今日デズデモナのものだと思われるハンカチでキャシオーが髭をふいているのを見たという証言により、オセローは一気にイアーゴの策略にはまり、妻の不貞を信じ込んでしまう。しかし実際は、そのハンカチはエミリアがイアーゴにしつこくせがまれて盗み出したものであり、イアーゴがオセローに伝えたことは真っ赤な嘘である。イアーゴが「そのハンカチであれば、少なくとも奥様のものでは、ほかの証拠とあわせて奥様には不利なことになりましょう」(If it be that, or any that was hers, /It speaks against her with the other proofs) (Ⅲ.3.443.444) とオセローに言うように、最初に贈った記念すべきものであるハンカチを他の男に贈ったとなれば、オセローへの気持ちも離れていることは明白であり、裏切りであると見なされても仕方のないことだろう。

オセローは「涙が出て仕方がない」(I have a salt and sullen rheum offends me) (Ⅲ.4.51) という理由で、デズデモナにこの場でハンカチを持って来るように命じることにより、イアーゴが主張するこれらのことが真実であるのか否かを確かめようとする。だが、デズデモナの返事は今手元がないというものであり、なくしたと認めようとはしなかった。それに対しオセローがハンカチの逸話をこのように語っている。

#### OTHELLO

That's a fault. That handkerchief  
Did an Egyptian to my mother give,  
She was a charmer and could almost  
read  
The thoughts of people. She told her,  
while she kept it,

'Twould make her amiable and sub-  
due my father  
Entirely to her love; but if she lost it  
Or made a gift of it, my father's eye  
Should hold her loathed and his spirits  
should hunt  
After new fancies. She, dying, gave it  
me  
And bid me, when my fate would  
have me wive,  
To give it her. I did so, and- take  
heed on't!  
Make it a darling, like precious eye! -  
To lose't or give't away were such  
perdition  
As nothing else could match.  
(Ⅲ. 4. 58-69)

## オセロー

それはいかん。あのハンカチはな、あるジブシー女<sup>3</sup>がおれの母にくれたものだ。その女は魔法使いで、人の心を読むことができた。

その女が母に言ったそうだ。このハンカチをしっかりと身につけていれば、夫にかわいがられ、その愛をひとり占めにできるだろう。

が、もしなくしたり、人にやったりすれば、たちまち夫の目には嫌悪の色が浮かび、その心は新しい浮気を求めて離れていくだろうと。

母は死ぬときあれをおれにくれて、さいわい妻をめとる火がきたらその人にあげなさい、と言った。

おれはそのとおりにした。だからいいな、あれを自分の目のように大切にするのだ。なくしたり人にやったりすればとり返しのつかぬ身の破滅となるぞ。

これがオセローのとっさに作り上げた嘘で

あると見るものと、本当にオセローの母親はジブシー女からこのハンカチを貰ったものであるという2つの解釈があるが、いずれにせよ「奥様はとても大事になさり／旦那様のお言いつけどおりいつも肌身離さず／もっていらして、これにキスしたり話しかけたりという始末」(but she so loves the token/-For he conjured her she should ever keep it-/That she reserves it evermore about her /To kiss and talk to) (Ⅲ. 3. 297-300) とエミリアが独白しているように、尋常でないほどハンカチを大事にしていることが伺える。しかし、これは他でもない愛するオセローからの贈り物であり、更には「最初の記念の品」(first remembrance) (Ⅲ. 3. 288) であったからであって、これまで知ることのなかった不思議なハンカチの秘話が彼女のハンカチを大事にしている気持ちに必ずしも影響を与えているとは言えないだろう。オセローは上記引用部をデズデモーナに言うことによって生じる顔色の変化などを通して彼女の貞淑さを見ていたのではないだろうか。

以上のことを聞いたデズデモーナの「そのようなことがほんとうに？」(I'faith, is't true?) (Ⅲ. 4. 79) という驚きの声に対してオセローはこうも言っている。

## OTHELLO

'Tis true, there's magic in the web of  
it.

A sibyl that had numbered in the  
world

The sun to course two hundred  
compasses,

In her prophetic fury sewed the work;  
The worms were hallowed that did  
breed the silk,

And it was dyed in mummy, which  
the skilful

Conserved of maidens' hearts.

(Ⅲ.4.71-77)

オセロー

ほんとうなのだ、あれには魔法が織りこんである。

二百年もこの世にあって太陽の運行を見つめてきた巫女が、神がかりの状態である模様を縫い上げたのみならず、神の前で清められた蚕の吐く絹糸をもらい、秘法をもって乙女の心臓のミイラからしばらくとった薬液に漬けて染めあげたものだ。

このオセローの説明により、更に摩訶不思議な事実がデズデモーナに告げられる。200年もの歳月を生きた巫女が靈感を受けた興奮状態（‘prophetic fury’）の中で、縫い上げたものだという。それだけでも信じがたいのだが、更に絹糸を吐く蚕までが神聖なものであり、染料は乙女（処女）のミイラの心臓から搾り取った薬液、挙句の果てにはそれさえも秘法をもって採取したもの<sup>4</sup>であるから、デズデモーナが信じられないのも無理が無いだろう。その信憑性は疑わしいにしろ、それによってハンカチの神秘性が高められていることに関しては疑いの余地はない。オセロー以外の殆どの登場人物は皆ヴェニス人であり、オセローだけがムーア人という異邦人であることも作用して、異国的な、ミステリアスな香りが感じられる。オセローの物語には人間を催眠にかける不思議な威力がある。例えば、元はと言えばオセローの人柄を高くかっており、よく自宅へ彼を招いていたデズデモーナの父ブラバンショーが、娘を魔法でたぶらかせて結婚に同意させたのだろうとオセローを叱責する場面がある他、以下のようなものが挙げられる。デズデモーナが落としてしまったハンカチをエミリアが盗み出す際に「旦那様の言いつけどおりいつも肌身離さず持っている」(For he conjured her she should

ever keep it -) (Ⅲ.3.291) と独白しているが、この“conjure”には「言いつけた」、「命じた」、という意味の他にも、「魔術師が魔物を呼び出す」、「呪術」を使うという意味があるということを石井が指摘している（石井、37-38）。このエミリアの台詞から、オセローが贈ったハンカチには魔術が込められているように感じさせられる。

ブラバンショーは、娘が同国人の若者たちではなくオセローのような年齢、人種、外見の者を選んだことが理解できず、血を騒がせる怪しげな劇薬か、そのようなまじないをかけた魔薬をデズデモーナに用いてたぶらかされたのではと業を煮やす。そしてオセローはどのようにデズデモーナの愛を勝ち取ったのかを元老院議員らの前で公言し、またデズデモーナも「誰に忠実でならないといけないか」という父ブラバンショーの問いに彼女は「お母様が、その父親以上に／夫であるお父様に真心からつとめたように／私も夫であるムーア様に／真心からつくしたいと思います」

(And so much duty as my mother showed/ To you, preferring you before her father,/ So much I challenge that I may profess/ Due to the Moor my lord.)

(I.3.186-189) とオセローを選ぶことになる。ブラバンショーは2人を認めたというよりも、認めざるを得なくなったわけだが、彼は最後にオセローにこう言い残している。

BRABANTIO

Look to her, Moor, if thou hast eyes to see:

She has deceived her father, may thee.

OTHELLO

My life upon her faith. (I.3.293-295)

ブラバンショー

気をつけるがいい、ムーア、目を見開い

てな。

父親をだました娘のことだ、同じめに会うぞ、おまえもな。

オセロー

これの貞節にはいのちを賭けます！

この場面ではまだ、愛し合う2人には何も障害はなく、オセローは妻の貞節を微塵も疑っていない。しかし、この予言めいたブラバンショーの言葉が現実のものとなってしまふ。命を賭けると言い切っていたオセローは、デズデモーナの貞淑さが失われた後にまさしく言葉通りに命を失うことになるのである。デズデモーナに魔術を用いたのではないかとオセローを疑っていたブラバンショーが、皮肉なことにも、オセローのこれからの悲劇的な運命を予感していたことになる。

巫女が縫い上げ、乙女の心臓のミイラで染めあげたというハンカチは具体的な視覚的な描写があまりされていない。説明がなされていないということ自体がハンカチそのものの神秘性をより高める効果があり、更にこのブラバンショーの予言めいた警告、オセローのムーア人という人種や外見などが相乗効果を生み、より効果的にハンカチの神秘性や希少性を増すことになると言えるだろう。

## 2-2 性的なイメージ

— ‘strawberry’ と ‘sheet’ の関連性—

前述したように、『オセロー』の種本の1つは1566年にヴェニスで出版されたツインツィオの『百物語』第3篇第7話にある物語だとされている。このフランス語訳は1584年にパリで出版されているが、英訳は1753年以前のものとは知られていない。シェイクスピアがイタリア語を読めたことはまず考えられず、フランス語を十分に読みこなすほど堪能であったのかは大方の研究者も疑問視しているため、シェイクスピア時代にも英訳が出ており、そ

れが現在では消滅してしまったか、誰か原文を読んだ者から詳しく話を聞いたのだという説が主流となっている（小室、186）。

この物語に登場するハンカチは「モーロ風の、手のこんだ刺繍をほどこした」（河島、269）<sup>5</sup>のものであったが、これをシェイクスピアは複数の苺の刺繍に置き換えている。これにより、シェイクスピアが意図的に果物の中でも苺を選んだことには疑いの余地はないだろう。苺を結婚の象徴とした上で、シェイクスピアはツインツィオのプロットに結婚（marriage）と正義（justice）の問題の両方を凝縮させて新たに作り上げるために作り変えたのだという解釈もある（Boose、56）。

では、何故シェイクスピアは果物の中でも苺を選んだのだろうか。もっとも指摘されるものは、苺は赤いために白いハンカチと苺の刺繍というコントラストが真っ白な婚礼の夜のシーツと処女膜の破れた血を象徴しているというものである（石井、28）。観客から見れば、確かにハンカチのその赤い小さな模様は、苺というよりも赤く染まった血のように見える可能性が高いだろう。

『オセロー』には ‘bed’ や ‘sheets’ のような寝床を表す単語が数多く使われている。シェイクスピア全作品中『オセロー』は『ロミオとジュリエット』と並び ‘bed’ という単語が20回と最も多く用いられており、‘sheets’ はシェイクスピア作品中最多の5回が用いられている。このような語を何度も耳にし、血に染まったように見えるこのハンカチを目にすることによって、そのベッドに敷く真っ白な婚礼の夜のシーツと血をより連想させやすくなることが考えられる。デズデモーナも自ら何度かシーツについて言及している。これは、妻の不貞を信じ込んだオセローがデズデモーナを娼婦だと罵倒した後に、エミリアが嘆き悲しむデズデモーナを励ました後の台詞である。

## DESDEMONA

Prithee, tonight  
Lay on my bed my wedding sheets;  
remember, (IV. 2. 106)

## デズデモーナ

お願い、今夜のベッドに  
婚礼のときのシーツを敷いてちょうだい  
—忘れないで。

皮肉なことに、この時点でオセローはデズデモーナをベッドで絞め殺す決意を固めており、婚礼のシーツが彼女の息絶える場所となることが示唆されている。その後、エミリアが婚礼のときのシーツを敷いたことをこう告げる。

## EMILIA

I have laid those sheets you bade me  
on the bed.

## DESDEMONA

All's one. Good Faith, how foolish are  
our minds!  
If I do die before thee, prithee, shroud  
me  
In one of these same sheets.  
(IV. 3. 20-24)

## エミリア

お言いつけどおり、あのシーツを敷いて  
おきましたよ。

## デズデモーナ

なんでも同じなのに。人間の心ってばか  
なものね。  
私がおまえより先に死んだら、ね、その  
シーツで私を包んでね。

オセローに新婚当時の愛を思い出してほしいが故の繊細な女心だったのだろう。デズデモーナにとってこのシーツは彼女の愛の証で

もあり、また、潔白の身であるから貞節の証ともなる。今も変わらぬ愛で身体を包んでほしいという彼女の願いが伺える。また、婚礼の際のシーツをデズデモーナが望んだというのは決して偶然ではなく、『ロミオとジュリエット』や『アントニーとクレオパトラ』の恋人たちの最期に通底する死の場面と似通っているとも指摘されている。そしてまた、この2つの悲劇は何れも本来は死の空間である納骨堂などが愛を完成させる場となっており、デズデモーナの死のベッドは愛を完成するベッドになるというのである（三益、44）。

エミリアよりも先に死んだ場合、婚礼のシーツで包んでほしいというこのデズデモーナの台詞は、言葉通り自らの死を予感しており、またこの解釈のように彼女の死という一見悲劇に思える行為自体が愛の完成に繋がっているように見える。デズデモーナは、命を失うことによってオセローへの愛を貫くことになり、本来は死の場所として相応しいと思えるベッドであるが、愛を表現するためのベッドともなりうるのだ。

今度はオセローにとっての 'bed' あるいは 'sheet' がデズデモーナ殺害に対してどのような意味を持っていたのかを見ていく。

オセローがイアゴの策略により、キャシオーが馴染みの娼婦であるビアンカにハンカチを渡した場面を目撃する。それを見てデズデモーナの不貞を信じ込んでしまったオセローは、デズデモーナの美しい容姿、優れた知性、そして優しい性格を思い、それゆえにオセローはデズデモーナを許すことが出来ずに苦しむことになる。

## OTHELLO

Get me some poison, Iago, this night.  
I'll not expostulate with her, lest her  
body and beauty unproved my mind  
again. This night, Iago.

IAGO

Do it not with poison, strangle her in  
her bed—even the bed she hath  
contaminated.

OTHELLO

Good, good, the justice of it pleases;  
very good! (IV.1.201-206)

オセロー

毒を手に入れてくれ、イアーゴー—今夜  
だ。あれとは話しあいはず、あの美し  
いからだを見ればおれの心にもぶる—今  
夜だぞ、イアーゴー。

イアーゴー

毒はおよしなさい。ベッドの中で絞め殺  
すのです、奥さんが汚したそのベッドの  
なかで。

オセロー

よし、それがいい、その因果が気に入っ  
た、それでいこう。

オセローは当初デズデモーナの美しい体を傷つけたくはなかったため、刺殺ではなく毒殺にしようとしていたが、イアーゴーに毒ではなく不義を犯したベッドの中で絞め殺すよう促される。それに同意してデズデモーナをベッドの中で絞殺することになり、彼女は愛の証である最初の贈り物のハンカチの拡大版のようなシャツの上で息絶えることになるのだ。オセローがデズデモーナ殺害方法に流血的ではないものを選択した理由として、真っ白なシャツにこれ以上の染みをつけ汚したくないと願ったとも考えられる。『オックスフォード英語辞典』(OED)によると'sheet'には'napkin'、すなわちハンカチという意味も存在している。シェイクスピア作品においての'napkin'は殆どがハンカチのことを

指しているのである。そういった点も踏まえると、より一層ハンカチをシャツと同一視することが出来る。

また、イアーゴーの台詞の中に、ハンカチが性的なものであると示唆されている箇所がある。エミリアはハンカチを盗み出すまで、何故イアーゴーがそれを欲しがっていたのか、そして何に利用しようとしているのかを知らず、知ろうともしていない。それとは対照的に、彼女はデズデモーナがどれ程そのハンカチを大切にしていたのかは十分に知っていたのである。これはデズデモーナが落としてしまったハンカチをイアーゴーに渡すためにエミリアが盗み出した直後の場面である。

EMILIA

I have a thing for you—

IAGO

You have a thing for me? it is a com-  
mon thing—

EMILIA

Ha? (III.3.305-307)

エミリア

あんたにいいものをあげようと思ってい  
たのに。

イアーゴー

いいもの? そんなにおまえのものはよ  
かったかな。

エミリア

まあ!

エミリアの言う「いいもの」(a thing)とは勿論ハンカチのことを指しているが、それに対しイアーゴーの'thing'は女性の性器を指している。『大修館シェイクスピア双書オセロー』によると'common'には「ごく当たり前の」や「誰もが使える」という意味があり、後者の意味でとると、イアーゴーはエミリアの不貞を当てこすっていることにな

る。この一連の会話の後に、ハンカチがイーゴの手に渡ることになるのだが、この会話の段階ではイーゴはエミリアが渡そうとしたものが何であるか分かっていない。それにも拘わらず、性的な言葉で返答することによって、ハンカチの性的な意味合いがより増しているように思われる。

更にエミリア退場直後においても、ハンカチに性的な意味合いを思わせる独白がある。

IAGO

I will in Cassio's lodging lose this  
napkin,  
And let him find it. Trifles light as air  
Are to the jealous confirmations  
strong  
As proofs of holy writ.(Ⅲ.3.314-327)

イーゴ

このハンカチをキャシオの宿舎に落としておけば、  
あいつが見つかるだろう。空気のように軽いものでも、  
嫉妬に狂う男には、聖書のことばと同じ重みのある証拠の品となる。(下線部引用者)

この独白により、このハンカチがどのように扱われることになるのかが明かされる。デズデモナが落としたハンカチをエミリアが「拾い」、エミリアはイーゴに「渡し」、イーゴはキャシオの部屋に「落とし」、キャシオはそれを「拾い」、更にビアンカにハンカチの刺繍を写し取るようにと「渡す」。そしてまたビアンカは部屋で拾ったことなど嘘で、他の女から貰ったのだろうとキャシオにハンカチを「返す」。このように「落とす」「渡す」等の行為が繰り返されるハンカチは、結婚から出産へと至る女性性への変化の様子を表していると指摘されている(服部、27)。

ハンカチがデズデモナの不貞を決定付ける動かぬ証拠となることから、それが女性性を表していると言えるだろう。イーゴの口を借りると、ハンカチは「空気のように軽い」(Trifles light as air) ものである。しかし、そのような取るに足らない、単なる白い布が聖書と並べられ、オセローにとっては同じくらい、またはそれ以上の威力を発揮する不貞の証拠となってしまうと予言している。そして、彼はイーゴのまったく予言した通りになってしまうのである。本橋は「空気のように軽い」(Trifles light as air) の 'trifle' という言葉に着目している。これはつまらないこと、些細なこと、という意味のほかには性器という意味があるという(本橋、145)。これらのことから、少なくとも悲劇を引き起こした張本人であるイーゴはハンカチに性的なイメージを抱いていたと言えるだろう。ハンカチは性器を暗喩していると考えれば、ハンカチをなくしてしまうということは、すなわち不貞を犯すということに繋がりが生まれはしないか。ハンカチをなくしてしまったデズデモナは、実際には不貞をはたらいていなくてもハンカチを失うということによって、不義を犯した女だと見なされてしまうのである。前述した歴史的背景をも考慮すると、たかが白い布1枚をなくしただけで怒り狂うオセローの心情がすこしは理解できるだろう。

シェイクスピア作品では、'sheet' という言葉が直接寝床を表すことがある。例を挙げると、『ハムレット』では主人公ハムレットが語る最初の独白の中で、父王ハムレットが死んで間もなく再婚した母ガートルードの行動を責め立てている箇所である。

HAMLET She married--

O most wicked speed: to post  
With such dexterity to incestuous sheets,

It is not, nor it cannot come to good,  
But break my heart, for I must my  
tongue. (I. 2. 156-158)

#### ハムレット

母が結婚するとは一なんとともはや手早い  
ことか  
そそくさと近親相姦の床へお出ましとは、  
よくないぞ、いいはずがない、  
だが胸よ、張り裂けよ、この舌を黙らせ  
なければ。 (下線部引用者)

当時は夫の死後にその兄弟と結婚することは近親相姦の罪だとみなされていたため、ハムレットは彼の母の行為を責めている。彼は近親相姦の行われた場所として 'incestuous sheets' と 'sheet' という語を用いていることから、'sheet' という語が単にベッドの上に敷いてある白い布という意味だけではなく、寝床自体を意味していることが分かる。

また、前述したように、キャシオーがデズデモーナのものと思われるハンカチで髭をふいているのを見たという嘘の証言をイアーゴがオセローにしたことにより疑惑が深まることになるが、そのようなハンカチで男性の象徴である髭を拭くという行為はオセローにとって尚更赦しがたいこととは考えられないだろうか。ハンカチと顔を拭くことにまつわるこのような逸話が残っている。

1565年3月、当時のイングランド国王であるエリザベス1世の滞在するロンドン郊外のハンプトンコート宮殿のテニスコートである事件が発生した。女王の御前でレスター伯爵とノーフォーク公爵がテニスに興じていた。早春ではあったが汗ばむような気候であったらしく、試合の合間に大汗をかいたレスター伯爵は足早に女王に近づくと、いきなり女王の手からハンカチをひったくり、それで顔を拭いたという。それを見たノーフォーク伯爵は激怒し「なんと無礼な (too saucy!)、

このラケットでその顔をぶったたいてやりたい！」と叫び、罵り合いの大喧嘩となった (石井、6-7)。

シェイクスピアが生を受けたのは1564年、事件当時およそ1歳であった。この事件はスコットランド女王メアリー・スチュアートの大使トマス・ランドルフが目撃し祖国に書き送ったことから有名な事件となったようであるから、シェイクスピアがこの事件を知っており、それを念頭において作品を作り上げた可能性は大いにあるのではないだろうか。エリザベス1世は処女王として知られており、彼女のハンカチは処女性を表すものであるとされている。そして彼女の処女性を崇めるために当時多くのハンカチを持った寵臣たちの肖像が描かれており、その中には女王の愛人と噂された寵臣である、レスター伯爵ロバート・ダドリーも含まれていた (石井、5-18)。女王の処女性を表すハンカチで顔を拭くなど言語道断であったことを象徴する実在したこの事件と、キャシオーが男性性の象徴である髭をハンカチで拭いたということが似通っていることが指摘できる。

『オセロー』では、デズデモーナがオセローからの初めての贈り物であるハンカチをなくしてしまったことが、悲劇的な結末を引き起こす直接的な原因と見なされる。そしてそのハンカチの拡大版のようなシーツの上、すなわちベッドでデズデモーナが殺されることから、ハンカチがシーツ、そして性的な連想も促すベッドへと関連付けられているように考えられる。

### 3. シェイクスピア作品の「染み」 —『シンベリン』イモージュンの 不貞の証—

『オセロー』ではハンカチの唯一の外見上の描写である 'spotted with strawberries' 以外にも 'spotted' を用いている箇所がある。

それはイアーゴーがオセローとの約束通りキャシオーを刺し、キャシオーは脚に深手を負って叫び声をあげた時に、オセローはそれを聞きながら、「正直者」イアーゴーを褒め称え、今度は愛する妻デズデモーナを殺そうと、決意を新たに固める場面である。

#### OTHELLO

Forth of my heart those charms,  
thine eyes, are blotted.  
Thy bed, lust-stained, shall with lust's  
blood be spotted.  
(V. 1. 35-36)

#### オセロー

おれの胸からは、きさまの魔力の源、その目の輝きも消えたぞ、  
情欲に汚れたそのベッドを情欲の血で染めてやる、そう固く決めたぞ。  
(下線部引用者)

これらの台詞からオセローの裏切られた怒りが伝わってくるが、それと同時に彼にとってベッドというのは2人の愛を確かめ合う神聖な場所なのであることが伺える。神聖であればあるほどそれを穢されたことが赦しがたく、殺害場所をキャシオーとデズデモーナの不義の場となったのだらうとオセローが考えたベッドに選んだことがまた、一種の2人に対する復讐行為とも見なせるだろう。

ここでは上記引用の 'spotted' に着目していく。先の引用ではデズデモーナ殺害に絞殺を選び、血を流させぬようにしていたが、この 'spotted' という語の含まれたオセローの憎しみあふれるベッドに対する台詞を聞いて、血のような赤い染み、ハンカチの唯一の見た目の描写である 'spotted with handkerchief' を連想させられはしまいか。デズデモーナが苺模様の刺繍のハンカチをなくしたことによって、不貞が決定づけられているのである。シー

ツの上に広がる鮮血という視覚イメージから、血のついたシャツがハンカチの拡大版のようにも見え、苺模様が不吉なようにも思える。

シェイクスピア作品において 'spotted' という言葉が重要な意味を担っているのは決して『オセロー』だけではない。本橋は、シェイクスピア作品でしばしば言及される汚点 'spot' のついた身体は、ほとんどが女性のものであるということを指摘しており、『オセロー』のほか以下に4戯曲4箇所を挙げている(本橋、247-248)。

「お前が私の目を私自身の心の奥底に向けると、そこに黒く肌理の粗いしみが見える」『ハムレット』(3幕4場)、「女というおまえの性のなかで、最大の汚れ」『アントニオとクレオパトラ』(4幕12場)、「汚されて、やぶのイラクサ、ハチの尾のように突き刺す」『冬物語』(1幕2場)、「穢れたしみ」『マクベス』(5幕1場)といった台詞は、確かに全て女性にまつわるものである。この他にも、『シンベリン』のイモージュンの胸元にある5つのホクロが 'spotted' と表記されている。『シンベリン』はシェイクスピア晩年のロマンス劇に分類されている戯曲であり、以下のようなあらすじである。

ブリテン王シンベリンの王女イモージュンはポステュマスとひそかに結婚するが、父王は迎えたばかりの妃の連れ子クロートンと結婚させようとしていたために許されず、ポステュマスを父シンベリンに追放されてしまう。ポステュマスはイタリアに渡り、イモージュンの美しさや美德を褒め称え、「このイタリアじゅうどこを捜しても、私の愛する人の操を奪えるほどその道にたけた色事師は一人もいないはずだ」と言い切り、それを快く思わないヤーキモーがイモージュンの貞節に対して賭けを挑む。その結果、イモージュンはポステュマスが信じていたような貞淑の鑑の女性であると分かるが、それでも賭けに勝つために鞆の中に隠れてイモージュンの寝室に忍

び込み、賭けに勝った証拠として部屋の造りの詳細と、イモージュンのもって生まれた身体の特徴として左胸にあるホクロを記憶に留め、そしてポステュマスが彼女に贈った腕輪を抜き取り、持ち帰る。イタリアに戻ったヤーキモーはポステュマスに詳細を報告するが、イモージュンの貞節を信じて疑わないポステュマスは、寝室の様子はここにいても知りえるものであり、腕輪は侍女の一人が金で買われて盗んだものではないか、などと考え決定的な証拠にはならず、イモージュンの身体の特徴をより確かな証拠として要求する。最終的にイモージュンの不義の烙印を押ししたのは彼女の胸のホクロであった。

## IACHIMO

If you seek  
For further satisfying, under her  
breast—  
(Worthy her pressing) lies a mole,  
right proud  
Of that most delicate lodging. By my  
life,  
I kissed it, and it gave me present  
hunger  
To feed again, though full. You do  
remember  
This stain upon her?

## POSTHUMUS

Ay, and it doth confirm  
Another stain, as big as hell can hold,  
Were there no more but it.  
(II. 4. 132-141)

ヤーキモー どうしても

もっと納得のいく証拠がほしいと言われるなら、ほら、奥さんの胸もとに、あのふくよかな乳房をわがもの顔にして黒子(ほくろ)があるだろう。いのちをかけ

て言うが、私はあれにキスをした、するとたっぷり味わったはずなのにすぐにもたたりなくなって、またキスをした。真白な肌のあの黒い点々を覚えておいでだろうな？

ポステュマス

ああ、それだけで、地獄をおおいつくすほどの巨大な黒い汚点(しみ)のあることが動かぬ事実となった。

作品中幾たびとイモージュンの美しい白い肌についての言及がある。白い肌と黒いホクロ、そして白いハンカチと赤い苺というコントラストは色が異なるが、酷似している。更にイモージュンの胸のホクロは5つ、苺の刺繍は具体的に幾つあったのかは定かではないが複数であったことは確かであり、この点でも『オセロー』と『シンベリン』は類似している。実際にはイモージュンはヤーキモーに犯されることはなかったというポジティブな価値がある一方で、彼女の身体は寝室の家具と同一視されるというネガティブな面も併せ持っていた(吉原、186)。ヤーキモーの策略によりイモージュンの不貞を信じたポステュマスは、彼女のホクロを‘stain」[汚点、染み]と呼び、穢れと見なしている。ホクロは確かに染みであるが、本来汚れとは全く関係のない身体的な特徴である。ホクロは決して取り去ることが出来ないものであり、その部分を目立たせる効果がある。『マクベス』でもまた夢遊病になったマクベス夫人が、実際には血がついているわけではないのだが、自分の手についた「穢れた染み」を躍起になって洗い流そうとする。

女性にまつわる言及の多い‘spotted’であるが、それに加え、あまり好ましくない、可能ならば落としてしまいたいと思われるような「染み」として用いられることが多いようである。イモージュンのホクロも胸にあると

ということから女性ならではの場所であると感じられ、女性的な身体にある染み、汚点ということが不貞という不名誉さへより繋がりやすくなっている。言うまでもなく、イモーゼンの胸のホクロの存在は彼女には何ら落ち度はなく、ヤーキモーとポステュマスの以上のようなやり取りを彼女は知る由もない。自分の知らないところで、全く潔白である身ながら罪を負うことになってしまう。ポステュマスは妻イモーゼンに直接手を下そうとはせず、召使いに委ねるという違いがあるものの、愛していた妻に殺意を抱いた点ではオセローと似ている。また、『シンベリン』の結末部にもイモーゼンの兄であるギデアアスの首のホクロが正当な王の息子である証拠として登場するが、不貞の証とされてしまったイモーゼンと比較すると、血の繋がった兄妹でも性別によりホクロの扱われ方が正反対となっている。

以上のように、『オセロー』と『シンベリン』では様々な類似点が見受けられる。どちらの 'spotted' も現実には全くの出鱈目ではあるものの、決定的な不貞の証拠として用いられている。そして双方共に、その不名誉を回避することのできない女性の弱さが伺える。不貞の証拠はあっても、貞節な証拠というものはない。だが、この2つの作品での不貞の証拠は『シンベリン』では消すことの出来ない、始めから身体に存在するホクロであるが『オセロー』では愛の証の贈り物として描かれている点は異なる。デズデモーナの不貞の動かせぬ証拠へと変貌を遂げたあの苺模様の刺繍のハンカチが 'spotted with strawberries' と明記されていることが、女性の弱さとその結末の悲劇性を暗示しているのである。

## むすび

以上、『オセロー』に登場する苺模様の刺

繍のハンカチに焦点を当て、シェイクスピアの生きた当時のハンカチと現代のものとは如何に異なるのか、1枚のハンカチがどのように作品に影響を与えてきているのかを論じてきた。

『オセロー』に登場するハンカチは世界で一番有名なハンカチと言っても過言ではないほどである。それは本稿で繰り返し述べてきたように、オセローがデズデモーナに初めて贈った1枚のハンカチがデズデモーナの不貞の決定的な証拠となり、彼女はオセローに殺され、オセロー自身も自害するという悲劇的な結末を迎えるからである。それゆえトマス・ライマーは「ハンカチの悲劇」と呼んで揶揄したが、当時のハンカチは現代の観客や読者が思い浮かべるようなハンカチとは異なるということを念頭に置かなければならない。本稿では、現代と当時のハンカチが如何に異なるのかを例証してきた。現代とは比較にならないほど高価なものであり、より大判で正方形以外のものも存在していた。そしてハンカチは直接肌に触れるものであるため、なくすと気を許した証拠と見なされることもあった。

『オセロー』の寝床への言及の多さと白いハンカチの拡大版のようなシーツの上でデズデモーナが殺されることから、オセローがデズデモーナの不貞を信じるきっかけとなったハンカチからシーツへ連想しやすくなっている。そのようなハンカチをなくすことは婚礼の床を汚すことにも繋がり、歴史的にもハンカチが現代よりもはるかに重要視されていることを踏まえ、ハンカチをなくしてしまうということは、すなわち不貞を犯すということに繋がり生まれるのである。実際にエリザベス1世のハンカチにまつわる事件もあり、ハンカチが処女性を表すものとされていることを示している。ハンカチをなくしてしまったデズデモーナは、実際には不貞をはたらいていなくてもハンカチを失うということによって、不義を犯した女だと見なされてしまうの

である。

イアーゴによって唯一語られる、このハンカチの外見の描写である ‘spotted with strawberries’ の ‘spotted’ はシェイクスピア作品において ‘stain’ 「染み、汚点」と見なされることが多く、更には女性にまつわる染みや汚点として用いられている。『オセロー』のハンカチもまた、デズデモナの汚点を示すことになってしまう。『オセロー』と多数共通点のあるロマンス劇『シンペリン』でもまた、ホクロという身体の染みが不貞という不名誉へと結びついている。それらのことを踏まえると、「とるにならないもの」のように思われたハンカチが不貞の証拠と見なされることにも納得がいくのである。

作品からの引用は特に記載がない限り、  
Shakespeare, William. *Othello* (The Arden Shakespeare. Third Series) Ed. E. A. J. Honigmann, London: Thomas Nelson and Sons Ltd, 1997.

ウィリアム・シェイクスピア『オセロー』小田島雄志訳、白水社、1983年に拠る。

<sup>1</sup> 川地美子編訳『古典的シェイクスピア論叢—ベン・ジョンソンからカーライルまで』みすず書房、1994年の訳をここでは参考にしている。

<sup>2</sup> 本段落のヴェネチアにおけるハンカチのエピソードは、塩野七生『海の都の物語—ヴェネチア共和国の一千年』中央公論社、1980年、163頁に詳しい。

<sup>3</sup> Egyptian がジブシー女と訳されているのは、笹山隆編『大修館シェイクスピア双書—オセロー』大修館書店、1989年によると、これは当時のイギリスでは、「ジブシーはエジプトから来た人種だと考えられていた」ためである。

<sup>4</sup> 笹山隆編『大修館シェイクスピア双書—オセロー』大修館書店、1989年の訳をここでは参考にしている。

<sup>5</sup> 「モーロ」とはいわゆるムーア人のことであるが、ここでは呼び名でもあるのでイタリア語

のままこう訳したと訳者が記している。

## 参考文献

Boose, Linda. “Othello’s Handkerchief: “The Recognition and Pledge of Love” in *Critical Essays on Shakespeare’s Othello*, ed. Anthony Gerard Barthelemy, New York: Maxwell Macmillan International, 1994. 55-67.

Crystal David, Ben Crystal. *Shakespeare’s Words: A Glossary & Languages Companion* Foreword by Wells, Stanley, London: Penguin Books Ltd, 2002.

Shakespeare, William. *Hamlet* (The Arden Shakespeare the arden edition of the works of William Shakespeare) edited by Harold Jenkins, London : Methuen, 1982.

———. *Oxford Shakespeare: Cymbeline* (The Oxford Shakespeare), Ed. Roger Warren, New York: Oxford University Press, 2008.

Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner. *The Oxford English dictionary* 2nd ed. V.10. New York : Oxford University Press, 1989.

Romero, Joseph Z. “Emilia’s Intentions and the Handkerchief in Othello” 長崎ウエスレン大学編『長崎ウエスレン大学現代社会学部紀要』2 (1)、2004年、63-69頁

Rymer, Thomas. *A Short View of tragedy* (1693), London : Routledge/Thoemmes Press, 1994.

新井基祐『シェイクスピア四大悲劇—虚と実—』大阪教育図書、2005年

安西徹雄、井上健、小林章夫『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社、2005年

石井美樹子『「オセロ」—デズデモナの白いハンカチ—エリザベス女王の廷臣が手にする白いハンカチ』神奈川大学人文学会編、『人文研究』162号、2007年、5-59頁

チェザーレ・ヴェチェッリオ『西洋ルネサンスのファッションと生活』加藤なおみ訳、柏書房、2004年

大場建治『対訳・注解—研究社シェイクスピア選集10—オセロー』研究社、2008年

———『シェイクスピアの翻訳』研究社、2009年

河島英昭編『澁澤龍彦文学館 1—ルネサンスの箱』筑摩書房、1993年

- 川地美子編訳『古典のシェイクスピア論叢—ベン・ジョンソンからカーライルまで』みすず書房、1994年
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』みすず書房、1999年
- 小室金之助『シェイクスピアの謎 法律家のみたシェイクスピア』三修社、1997年
- コールリッジ・S・T『シェイクスピア批評—シェイクスピアとミルトンについての講演／悲劇作品傍注—』岡村由美子訳、こびあん書房、1991年
- シェイクスピア『シェイクスピア全集13 オセロー』松岡和子訳、筑摩書房、2006年
- 『オセロー』福田恆存、新潮社、1973年
- 『シェイクスピアVI オセロー十二夜』木下順次訳、懇談社、1988年
- シェイクスピア・ウィリアム『アントニーとクレオパトラ』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『シンペリン』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ジョン王』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ハムレット』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『冬物語』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『マクベス』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ロミオとジュリエット』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 塩野七生『海の都の物語 ヴェネチア共和国の二千年』中央公論社、1980年
- 菅原珠子、佐々木哲『西洋服飾史』朝倉書店、1985年
- 高杉玲子「オセローのハンカチ：『オセロー』における文化交換の倫理」、大東文化大学英文学会編『大東文化大学英米文学論叢』37号、2006年、11-25頁
- 高橋康也等編『研究社シェイクスピア辞典』研究社出版、2000年
- 田中千代編『図解 服飾事典』婦人画報社、1955年
- 辻原康夫『服飾の歴史をたどる世界地図』河出書房、2003年
- 服部厚子「『オセロー』における主体と空間形象」
- 鈴鹿医療科学大学編『鈴鹿医療科学大学紀要』14号、2007年、23-30頁
- 三益隆一「『オセロー』における逸脱と侵犯：「語り」と「物語」の視点から」金沢大学編『言語文化論叢』6号、2002-03年、27-50頁
- 本橋哲也『侵犯するシェイクスピア 境界の身体』青弓社、2009年
- 『本当はこわいシェイクスピア <性>と<植民地>への渦中へ』講談社2004年
- 森谷佐三郎『シェイクスピア百夜』こびあん書房、1987年
- 森本美樹『シェイクスピアの悲劇 オセロー—愛の旋律と不協和音—』芸文社、2003年
- 山崎稔恵「『オセロー』の、あの母模様のハンカチーフ」関東学院大学人間環境学部教養学会編、『関東学院大学人間環境学部教養学会紀要』創刊号、2003年、13-25頁
- 吉中孝志「解釈への不安—『オセロー』のハンカチーフについての図像学的注釈—」日本英文学會編『英文学研究』75号、研究社、1998年、205-218頁
- 吉原ゆかり「『シンペリン』における身体と国家身体」筑紫女学園大学編『筑紫女学園大学紀要』13号、2001年、183-204頁
- 依田義丸『シェイクスピア残酷劇からの誕生 『タイタス・アンドロニカス』の創作術』京都大学学術出版会、2006年
- 「ハンカチーフの歴史」  
<http://handkerchief-gallery.com/html/newpage.html?code=6> (2011/8/6アクセス)